

猫、そして野良猫について真面目に考える貴重なお話をいただいた後は、モデレーターの西村亮平先生（日本ペットサミット会長、東京大学獣医外科学教室教授）の進行のもと質疑応答の時間に入りました。それにさきがけ西村先生から「少しだけ補足させていただきますと、昔は人が与える餌だけだとタンパク質が足りず、猫は外でネズミを捕食しないと生きていけなかったという事情があったということをお伝えしておきます」とのひとことがありました。



－外猫に餌やりをしている人の多くは独居高齢者といいますが、それとは別に他人とは決して交流しないような闇の人間もいると感じています。日本ペットフード協会のアンケートのようなものにも答えないため、数字として表に出てくることがないと思います。そのような人たちがいる限り、たとえ日本がイギリスなどのように野良猫のいない社会を目指そうとも不可能ではないかと思うのですが。

小野塚先生：おっしゃる通りで、昼間ならば顔も見えますし声もかけられるのですが、夜中に餌やりをしている人たちを見かけることがあります。社会的には可視化されていないけれど餌やりをする人の存在というのは確かにあるでしょう。かつての英仏の帝国主義からすれば、そのような人は不帰順民族といわれていました。文明社会に従おうとせず、そこから逃れて自分たちの行動様式や価値観や規範を貫き通そうとする人たちのことです。そのような不帰順民族を帰順させる動きというのが、19世紀後半から20世紀前半にかけての英仏の植民地統治の最後の段階にありました。不帰順民族は山奥や誰もたどり着けない砂漠のへき地などに残ってしまうからです。かつての帝国主義ならば不帰順民族を帰順させようとしていましたが、今の時代、たとえ闇で餌やりをしている人がいても怪しい人間だと決めつけることはできませんよね。京都市のように餌やり禁止条例などをつくれば、何らかの方法で取り締まることはできるのでしょうか、そうなると、餌やりそのものを禁止することの是非という問題が出てくるのではないかと思います、そのあたりはいかがでしょう？

質問者：餌やりしていることが見つからないような人たちがいるんです。まるで忍者のような。そのような人たちは不帰順民族と同じようなものなのか、それとも日本独特のものであるのか分らないと思います。闇で活動する人たちは地域猫の運動に対して意識的に反抗している部分もあるかもしれません。そのような人たちがいる限り、野良猫を完全にいないようにするのは難しいと思うのです。

小野塚先生：そうですね。そこは難しいところですが、とにかく大事なのは野良猫の存在を完全に否定していいのか？という問いに対してどのように考えるか、ということになってくると思います。野良猫を完全に人間の管理下に置いてしまい、野良猫という形では繁殖しないようにすることがいいのか、それとも地域の多くの人々が受忍できる程度に野良猫が存在する社会が猫にとっても人間にとっても望ましいのか、このあたりの折り合いを考えるべきだと思います。闇で活動せずにしっかり折り合いをつけていこうとできないものではないでしょうか。

長田氏：このような議論をすることがとても大事だと強く思いながら聞いていました。犬と比較して考えますと、まず、野良犬については狂犬病のこともあり、野良犬のいない社会をつくろうという社会的合意が共有されてきて、それに成功した地域が出てきました。成功せずにいる地域はまだ苦勞されていますが、大きな方向性としては野良犬のいない社会をつくっていこうというムーブメントになっています。もちろん野良犬をいなくすることに反対されている方もいると思いますが、野良猫については、まだ野良犬のような状態にはなっていませんが、ひとつに地域猫活動をどのように評価するかがあります。地域猫活動は行政が支援をし、地域の取り組みとして進めていきたいと思いますという政策です。地域猫活動が成功すればその地域の野良猫はゼロになります。しかし野良猫がゼロになった地域があるとはまだ聞いたことがありません。猫がゼロにならないことを良しとするのか、活動の失敗と見なすのか。あるいは生殖という観点からすると、動物に与えなくてはならない5つの自由の中のひとつとも考えられますから、そのあたりのジレンマをどのように考えていくかなど、いろいろな議論があると思います。社会像のイメージとして野良猫がいた方がいいという人といない方がいいという人が議論をして、いることによるメリット・デメリット、いないことによるメリット・デメリットを総合的に考え、どこかの段階である程度国民の理解が得られる社会の姿をつくっていくというのが理想的ではないかと考えています。少なくとも行政が押し付けてどうにかするという問題ではないと、現時点では個人的に思っています。

西村先生：いわゆる猫おばさんや猫おじさんについて行政はどのようにとらえているのでしょうか？

長田氏：現在は、基本的にはルールに基づく餌やりを進めていきたいと思いますという、TNRを伴う地域猫活動というのがひとつの方向性としてあると思っています。それが適正に評価されていかなければならない段階では、地域において苦勞して合意形成をして、去勢手術もして、時間も決めて餌やりをして、糞も片付けてという方々からすると、好きな時間に好きなように餌を与える人にはいい思いをしていないと思います。彼らがやっていることで、自分たちの地域猫活動への誤解を招いたりすることもあるでしょう。環境省としては、きちんとした地域合意形成をしたうえでの餌やりをしていくというのが最低限必要なことと考えています。ですから、政策を進める立場からしますと、個人的に餌やりをするというのは今は容認できないと申し上げておきたいと思います。

**－室内飼育の徹底や TNR によって野良猫をゼロにするのを目指すより、折り合いのつく程度の野良猫がいて、野良猫の状態でも繁殖をしてもいいのではないかというご意見に感じました。私自身も野良猫にまったく出会わない社会は寂しいという気持ちはあるものの、地域猫活動をしている身としては、可愛がられて餌も十分にもらえて自由気ままに暮らしている猫はエリート中のエリートだと感じています。エリート猫になれずに生きていくのが大変だったり、交通事故にあたりする猫が大半だと思うのです。野良猫の一部だけが幸せに暮らせるのではなく、折り合いのつく頭数の猫がみなそこそこ幸せに暮らせる環境が作れるものとお考えなのでしょうか。**

小野塚先生：野良猫の数は今よりも昔の方が少なかったと思います。たとえば江戸時代や明治時代などは餌の相対価格が高かったですし、十分な栄養を人から得られなかったので、猫はそれほど子孫を増やしていくことができなかつたはずで、そのあたりの時代には過剰な数の野良猫はいなかったと思われます。きちんとした統計があればいいのですが、ありませんので、私の勘でいいますと、今はある特定の地域で野良猫が増えていると思っています。特定の地域とは、確信犯的にこっそりと野良猫に餌を与え続ける人がいるところです。10年間それを続ければ絶対に猫は増えます。そのようなことが野良猫問題のひとつにあると考えています。

もうひとつ、人から可愛がられず、餌ももらえずに衰弱して死んだり、他の動物に襲われて死んだり、交通事故にあつて死んだりする猫がいるということについて、私は、野良猫の総数を減らしたところで、エリート猫とそ

うでない猫の比率は変わらないと思います。それは野良猫という存在の仕方の宿命みたいなものではないかと。そういったことも含めて、我々は野良猫の存在を容認するかしないかということではないかと考えています。不幸な死に方をしてしまうかもしれない可能性を含めても、外を自由に歩ける幸せが猫にはあるのではないかと思うのです。先ほど、私は猫の気持ちは分からないといましたが、猫の気持ちが分からなければ野良猫について何もできないということではありません。それは介護や育児において、自ら意思表示ができないからといってその相手に対して何もしていいとはならないのと同じことです。相手の幸せが何かを考え、幸せになる方向に何かをしてあげるとというのが介護や育児の本質だとすると、野良猫との関係においても、自由に外を歩いて繁殖ができ、もちろんある程度の高い確率で死亡することも含めて、それが野良猫の幸せなんだという考え方もあり得るのではないかと私は思っています。

西村先生：私も小野塚先生の考えに非常に近いです。福岡に猫島がありますが、その島で生まれた猫が1歳まで生き残る可能性は10%くらいだそうです。だからこそ猫の数が一定に保たれているのですが、それが自然というものなんだろうなという気がします。猫はたくさん子を産むという生き残り戦略をとることで種を繁栄させてきたのですから。そのあたりについて人があまり口出しをすることではないのではないかと個人的には思うところです。

**－野良猫として繁殖した場合、生き残っている成猫の数の5～10倍の子猫が死亡しているだろうとのお話でしたが、その中には悲惨な死に方をすることがあります。そのひとつが交通事故だと思いますが、人ばかりでなく猫も交通事故に遭わないようなコミュニティをつくってあげれば、それは小さな子どもや高齢者にとっても安心な社会になっていると言えるのではないのでしょうか。つまり、飼い猫が外に出て行っても安心な社会を目指すべきではないかと。IDタグなどをつけるようにすれば飼い主が誰であるかもわかります。**

小野塚先生：半野良も飼い主が分かるようにするというのは大賛成です。半野良と完全野良の区別がつかないところが、野良猫問題を難しくしているかなりの原因ではないかと思っていますからです。ですので、半野良と完全野良の区別がつくような仕組みをつくって、地域の人々がその猫がどこの誰なのかがわかるようにできれば、それは野良猫の存在の仕方としては人間が誘導できる望ましい方法と考えています。ただし、それでもやはり野良猫として生きていく以上、半野良であってもカラスにつつかれて命を落とす危険性はありますし、どこかで不幸な死に方をする可能性もなくなりません。それでも自由に外を歩き、ほかの猫と交わることが猫には幸せなのだろうと思うのです。また、野良猫の場合には必ずしも飼い主がはっきりしていませんので、地域住民が対応していく必要があると思います。

今は野良猫をめぐる問題において、とにかく管理して目に見える形にしておけばとりあえずは安心という方向に傾きすぎているのではないかと感じます。野良猫の子猫の死亡率の高さや死に方なども含めて、この地域ではある程度の数まで野良猫を許しましょうよ、というようなところまで踏み込んだ議論が必要ではないかと考えています。

西村先生：動物福祉で掲げられている5つの自由の中には、本来持っている行動を保証するというものがありますが、完全な家猫は初めからすでに5つのうち1つが欠けていると言えます。外でウロウロする権利はほぼ、はく奪されている状況ですから。

**－猫から自由を奪ってしまうことにもなりますが、殺処分がある以上、繁殖制限は外せないかと思うのです。子猫の殺処分数が多いことから、やはり繁殖制限することが大事だと考えています。**

長田氏：犬も猫も飼い主が責任を持って飼いましょうというのが大原則です。今は、室内飼育と所有者明示、不妊去勢手術が飼い主に対する啓発の柱となっています。そもそも猫は民法の上の考え方でいえば財産になりますので、財産を持っている人には管理責任があります。ですので、飼っている猫がさまざまな問題をもたらしたとしたら、その問題に対する責任は飼い主にあるべきだと思っています。そのような責任を取らない人が、たとえば去勢手術を行っていない猫に餌をやるということがあれば、それは、責任を取っている人との関係においても、餌を与えられている猫から被害を受けている人に対しての責任も含めてバランスが悪いと思います。現時点で、責任を取らない人が勝手に猫に餌やりをし、そこから生まれた子猫を引き取って殺処分することへの税負担は国民がしています。つまり、勝手に餌やりをしている人は責任を取らず、むしろ被害を受けている人が税負担をしているという問題があることを認識しておく必要があると思います。

そのうえで、どのような社会を目指していくか？というのが、まさに今日のキーワードでもあった「寛容性」をどうとらえるかということだと思っています。私はまだ「寛容」になるべきだという確信は持てていませんし、責任を果たすということがまず大事だと思っていますが、たくさんの議論を交わしたうえで皆が寛容になりましょうというのであれば、それが社会の目指すひとつの方向性になり得るとは思います。

西村先生：この会のテーマでもある「いい加減＝寛容性」は、日本社会を救うキーワードではないかと思っています。動物の問題を考えることは、実は、人間社会が今後どうあるべきかを考えることにもなるのです。どのような動物でもいいのですが、猫はそのような観点からしても、とてもいいテーマではないかと思っています。

ー今日は、「必死すぎる猫」などの写真集を出している沖昌之さんが来ているのですが、猫写真家から見た野良猫はどのような存在なのでしょうか。

沖さん：猫の明るいサイド、「可愛いね」とか「生き生きしているね」という部分を撮りたいと思っており、それを意識的に撮っているところがあります。そこから外にいる猫に対して目を向けてみたり、関心を持ってもらえればと。外にいる猫の存在を普通に気に留めるような世の中になってくれたらいいなという思いがあります。